

51 回目を迎えたいわて生協バスボランティア

要望が多く冬季の中断を経て再会へ

いわて生協のバスボランティアが再開されました。2012年3月17日に陸前高田市の現地ボランティアセンターの要請で竹駒地区の未来商店街づくりのための土のうづくりを手伝い、広田町天王前の「ふれあいひろば」づくりを再開しました。

バスボランティアは昨年から数えて51回目となり(そのうちの5回は雨で中止)今回は33人が参加、全部合わせると1804人が参加しています。特にいわて生協では、津波でコミュニティーを失ないバラバラになってしまった被災者の皆さんが再び集って、ゲートボールなどの交流ができるひろばづくりに取り組んでいます。今回は昨年12月11日のバスボランティアを最後に作業が中断していた広田町のひろばの整備を行ないました。

この日は天候が悪く午後には雨が降ってきたので作業は午前中で終わりました。また3日前には大きな余震があり、この一帯は津波警報がだされ住民も避難したといわれています。もし津波警報が出たら高台の避難所に逃げるようボランティアセンターから強く言われ緊張した作業となりました。

バスボランティアは寒くなったことから1月と2月は中断していましたが、今年に入ってから問い合わせなどが多くなり再開に結びついたと、金子敏明

(かねこ としあき)いわて生活協同組合人材・組織開発部部長バスボランティア

担当は言います。「本当は継続したかったのですが、冬場になり寒い中での作業はリスクが高くなることと参加者も少なくなるだろうということで、残念ですが休まざるをえませんでした。しかし、皆さんから最後となった12月に『来年もやりましょう』と声をかけていただき、また2月の組合員の集いでも再開の話が出て待っている方がたくさんいることがわかったのです。2週間ほど前までは雪が降っていて、やっと再開にこぎつけました」。

今後の取り組みについて、「冬になって全国からくるボランティアが減り、被災者の中からは『もう来ないんですか。やって欲しいことはたくさんある』とっていました。行政で全てできるわけではなくまだ相当ボランティアのニーズはあります」。そして取り組みの基本は「現地のボランティアセンターの依頼を収捨選択せずに受けますが、できるだけ『ふれあい広場』づくりのような、復興支援に役立つ事業を続たいと思います。仮設にいる男性が引き籠もることが心配されており、これには年配の方の野球チームがあるので、プレーができる球場を土地をかりてつくりたいと思っています。また、陸前高田では津波が来たラインに沿ってシンボルとなる桜を植える動きがはじまっています。これへの参加を検討します。春になって雪が解けると、今日の作業でも取り組んだ畑づくりも始まり手伝う



山の畑から運んだ土を後方の更地に広げて
農地にする作業を手伝う

ことはたくさん出てきます」と今後も継続を検討したいと言います(次回は3月24日ですがその後の計画はまだない)。

若者の人が足りないという声を聞いて参加

ふれあい広場には球技場の他に花壇もつくられており、昨年11月に植えた花の球根が芽をだしていました。ところが中断している間に周りの土が風で飛ばされたので埋め戻す作業が行なわれました。この作業をしていた福島市内から来た下館希羅(しもだて きら)さんは、今回で2回目の参加だと言います。「千葉県から原発事故の放射能が不安で二人の子供と盛岡市内にある実家を頼って避難してきています」。ボランティアに参加した動機については「私にできることがあればお役に立ちたいと思ったからです。8月ころからボランティアの募集を探して、ネット上でいわて生協のバスボランティアを見つけたのです」と言います。さらに下館さんは、「震災から1年がたって、ボランティア同士の仲間意識のつながりができて来たように思います。阪神大震災のとき、私たちは遠くから見ている感じでしたが、いまはもっと身近なものとして感じるようになりました」と話してくれました。

花壇に吹寄せられた砂を書き出す作業をしていた69歳の川島道雄(かわしまみちお)さんは、今回で23回目のバスボランティアです。ボランティアに参加した動機は「新聞の声欄に、ボランティアに参加した若者の体験談として『ともかく人が足りない』と書いてあるのを読んだからです」。定年退職して仕事はしていないので時間はあるのだが「年をとっているのが不安でしたが、少しでもお役に立つことができればと思ったんです。そこで、勇気を振るっていわて生協さんに電話したんです。そうしたら『何歳でも結構です。ぜひご参加ください』と言われて勇気づけられてたんです」。最初の参加は去年の4月末で、当時は大槌に行き23回のうちで半分ほどは陸前高田に来て広場づくりなどを手伝っていると言います。さらに、川島さんは「他県から来ているたくさんのボランティアを見てみると、若いのに偉いなーと思いつつ、いま被災から1年経ってもこの惨状を見ると、まだまだボランティアを続けなければと思いました。少しでも参加する機会が増え、復旧復興に役立つといいと思っています」と話します。



埋まった花壇を掘り起こし植生に土をかける